

伝二一条為明筆源氏物語切「賢木」の性格

池 尾 和 也

はじめに

二条為明を伝称筆者とする源氏物語切は、比較的数量多く知られており、『増補新撰古筆名葉集』（安政五¹1858年版）「同（二条家）為明卿」条に「同（六半）源氏此外類切多シ」とあるように、すでに江戸期には為明筆と称する六半形の源氏物語切が広く流通していたことが窺われる。²本稿では、同じく「賢木」を書写内容とする二種二葉の伝為明筆六半切を紹介するが、整理の都合上、番号（漢数字）を付して区別しておいた。

1、伝二条為明筆六半切〔源氏物語・賢木〕(一)

図版①は未装の断簡で、極札(楮紙、一四・一×二・二cm)には、

〔表〕二條家為明卿將はとうの〔琴山(墨印)〕

〔裏〕切〔朱割印〕癸巳三〔了延(墨印)〕

とあり、古筆本家七代了延が安永二1773年三月に極めたものと知られる(了延は安永三年七月十五日没、七十一歳)。本紙裏右上辺に「為明」と小字墨書。本紙の料紙は楮打紙、一五・七×一三・六cmで、一面十行書であるが、一行分の切り取りが予想され、元は一面十一行書の六半形冊子本と推定される。ツレは確認していない。伝称筆者の二条為明は、永仁三1295年〜正平十九(貞治三)1364年十月二十七日薨、七十歳⁽³⁾。為明の真蹟としては東京国立博物館蔵『古今和歌集』(元亨四1324年九月中旬書写)があるが、これと比較すると本切は別筆である。本切の書写年代は鎌倉後〜末期頃で、為明の生存期間に重なる。

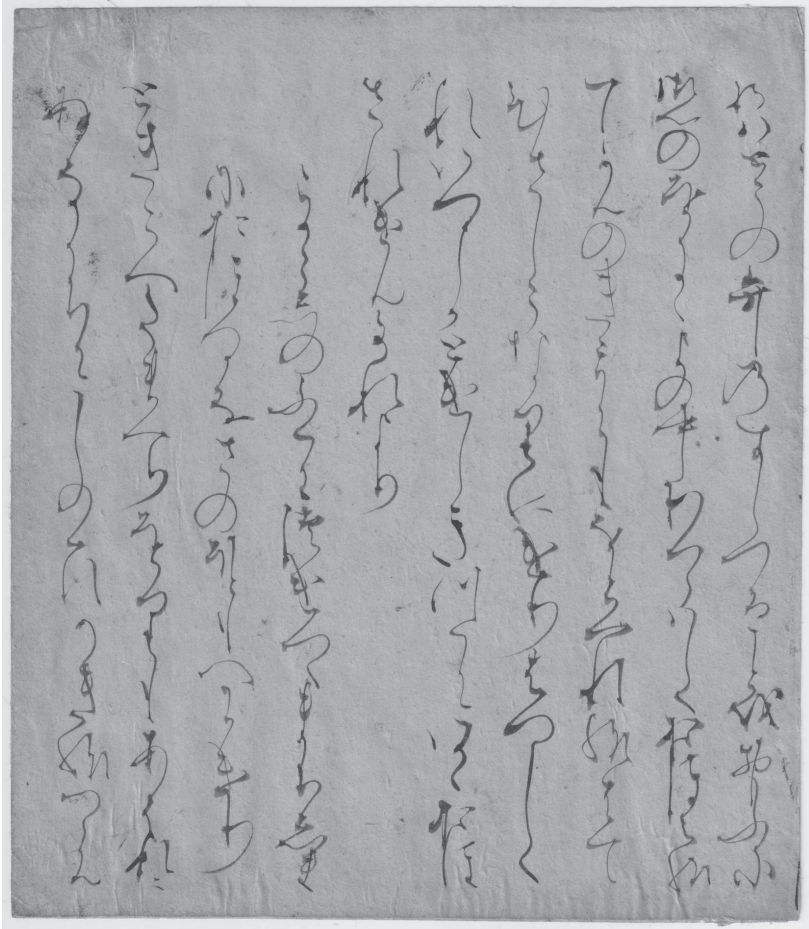
本紙を翻刻しておく、

將はとうの弁のすしつることをおもふに

御心のをに、よの中わつらはしくおほえ給

てかんのきみにもをとつれ給はて

ひさしうなりにけりはつしく



図版① 伝二条為明筆六半切〔源氏物語・賢木〕(一)

れいつしかとけしきつくにいかゝおほ

されけんかれより

こからしのふくにつけつゝまちしま

におほつかなさのほともへにけり

ときこへたまへりをりもあはれに

あなかちにしのひかき給つらん

となる。書写内容は『源氏物語』「賢木」(『源氏物語大成』⁴三六三頁8〜12行)／『源氏物語別本集成』⁵文節番号103775〜3813)と、源氏が内裏からの退出の折、頭弁(弘徽殿太后甥、麗景殿女御兄)に朧月夜とのことを諷され、それを気に病んで連絡を取らずにいるうちに、初時雨の頃、朧月夜の方から便りが来るといふ場面である。

次に、架蔵切を底本として、文節単位で諸本との校異を一覧しておきたい。使用した校合本は、「別本集成」、「源氏物語別本集成統」⁶(以下、「別本集成統」)、『河内本源氏物語校異集成』⁷(以下、「河内本集成」)所収の諸本及び「大成」校合本のうち上記書に未所収の横山本を「大成」に依って加えたほか、私に数本を付け足した(諸本略号)参照⁸。横山本及び「河内本集成」所収本文は、表記が確定できるもの以外には「」を付した。校異符号は「別本集成統」にしたがうが、⁹可能なかぎり振り仮名＝右傍書とし、処理しきれない情報は校異略号下に「↓」を付して補足した。音便の有無、撥音便の表記・不表記等は異同とは見做さなかった。

以下の異同一覧には、系統別に分類し易いように記号を付して明瞭化を図った(丸付き数字は架蔵切の行数、4桁の算用数字は別本集成文節番号。架蔵切本文中、欠損のあるものには※を付して示したが、予測される本文が明瞭で

あるものについては、同一本文と判断されるものを底本に併記した。別本は、のちの整理のために二分した。

- 別本系統(陽明文庫本・御物本)と一致(片方のみの一致は○)
- 別本系統(国冬本・伝為相本)と一致(片方のみの一致は●)
- △ 河内本系統と一致(一部のみの一致は△)
- × 定家本系統と一致(阿里莫本・穂久邇文庫本のみの一致は×)
- ◎ 架蔵切の独自異文

① 3775 ※○●△〔^天〕将は(架)・大将は(陽御国相阿尾高〔七平兼岩〕米)——大将殿は(天大)・大将(古池肖日伏穂保〔横〕榊徹研証正)・大将(前)

① 3776 ○●△×とうの弁の(架)・頭弁の(古国阿尾池日伏穂保前高天〔七平大兼岩横〕榊徹研証米正)・頭弁の(肖)・とうのへんの(御)——とうの弁(陽)・弁の(相)

① 3777 ○●△×すしつる(架古池日伏穂保前〔横〕榊徹研証正)・すんしつる(陽国相天米)・すむしつる(御尾高〔七平大兼岩〕)・すしつる(肖)——すんせし(阿)

① 3778 ○●×ことを(架古陽御相肖日保〔横〕正)・事を(池伏前榊徹研証)——こと(穂)・事(阿)・こと(国)・ことも(天)・事も(尾高〔七平大兼岩〕米)

① 3779 ○×おもふに(架池日榊正)・思ふに(古〔横〕徹)・をもふに(穂)・思に(陽阿肖伏保研証)・思に(前)——ナシ(御尾高天〔七平大兼岩〕米)・おもふ(相)・思ふにも(国)

② 3780 ○×御心の(架古陽御阿池肖伏保前〔横〕榊徹研証正)・御ころの(日穂)——心の(国尾高天〔七平大兼

岩]米)・よの心の(相)

② 3781 ○●×をに、(架陽御相伏穂保)・おに、(古国池肖日前[横] 榊徹研証正)・鬼に(阿)―おに、おそろしく(尾天「七平大兼岩」米)・おに、をそろしく(高)

② 3782 ○△×よの中(架)・世中(古陽阿肖伏保前天「七平大兼岩横」榊徹研証米正)・世の中(高)・よのなか(尾池日)―ナシ(御国相)・世中の中も(穂)

② 3783 ○△×わつらはしく(架陽尾高天大)・わつらはしう(古阿池肖日伏穂保前「七平兼岩横」榊徹研証米正)―わつらはしう世の中いよくはしたなく(御)・わつらはしくよの中いよく(国)・わつらはしういよく(相)

② 3784 ○●△×おほえ(架古陽御国尾池肖日伏保前高天「七平大兼岩横」榊徹研証米正)・覚え(穂)―ナシ(相)・おもほし(阿)

②③ 3785 ○●△×給て(架古陽国阿尾池肖伏穂保前高天「七平大兼岩横」徹研証米正)・たまひて(御日榊)―ナシ(相)

③ 3786 ○●△×かんのきみにも(明陽尾池日証正)・かんの君にも(相阿伏穂榊研米)・かむの君にも(古肖保高天「七平大兼岩横」徹)・かむのきみにも(国)・かむ^ニの君にも(前)―かんの君にひさしく(御)

③ 3787 ○●△×をとつれ(架古御阿尾肖伏穂保前天「七平大兼岩横」榊徹研証正)・おとつれ(陽国相池日)・音つれ(高米)↓対照異同ナシ

③ 3788 ○△ナシ(架御尾高天「七平大兼岩」徹米)―きこえ(古陽相池肖日保[横] 榊証正)・きこゑ(伏)・きこへ(国穂)・聞え(阿前研)

- ③ 3789 ○ ● △×給はて (架古陽国阿尾肖日伏穂保前高天〔七平大兼岩横〕榊徹証正)・たまはて (池研米) ―たまはて (御)・たまはず (相)
- ④ 3790 ○ ● △×ひさしう (架阿尾池日伏穂保高〔七平大兼岩〕榊研米)・久しう (天)・ひさしく (陽国相横証)・久しく (肖正)・久しく (前)・久く (徹) ―ナシ (御)
- ④ 3791 ○ ● △×なりにけり (架古陽国尾池日伏穂保高天〔七平大兼岩横〕榊研証米)・成にけり (阿肖前徹正) ―ナシ (御)・なりぬ (相)
- ④ ~ ⑤ 3792 ○ ● △×はつしくれ (架古陽御相尾池日伏穂高天〔七平大兼岩横〕榊研証)・はつ時雨 (阿保前徹)・初時雨 (肖正) ―しくれ (国)・はつかしくれ (米)
- ⑤ 3793 ○ ● △×いつしかと (架古国相阿尾池肖日伏穂保前高天〔七平大兼岩横〕榊徹研証米正) ―いつしか (陽御)
- ⑤ 3794 ○ ● △×けしくつくに (架) ―けしきたつに (古御阿尾池伏保〔七平大兼横〕榊米)・けしきたつに (肖日高天)・気色たつね (穂)・けしきはむに (陽)・けしきつくる (相)・けしきたつひ (国)・けしきたつひ (岩)・気しきたつひ (研)・気しき立日 (前)・気色たつひ (徹証正)
- ⑤ 3795 ○ ● △×いかゝ (架古陽御国相阿尾池肖日伏穂保前高天〔七平大兼岩横〕榊徹研証米正) ↓対照異同ナシ
- ⑤ ~ ⑥ 3796 ○ ● △おほされけん (架陽御国相天〔七平大兼岩〕米)・おほされけむ (尾高) ―おほしけん (古池肖日伏穂保前〔横〕徹証正)・おほしけむ (榊研)・おもほしけん (阿)
- ⑥ 3797 ○ ● △×かれより (架古陽御国相阿尾池肖日伏穂保前天〔七平大兼岩横〕榊徹研証米正) ―かれより (高)
- ⑦ 3798 ○ ● △×こからしの (架陽御国相阿尾池日伏保榊研米)・木からしの (古穂天〔七平大兼岩横〕徹証正)・木臘月夜からしの (肖)・こからしの (高)・木臘からしの (前) ↓対照異同ナシ

- ⑦ 3799 ○ ● △×ふくに (架古陽国相尾池日伏穂高〔七平大兼岩横〕榊研米)・吹に (御阿肖保前天徹証正) ↓对照
異同ナシ
- ⑦ 3800 ○ ● △×つけつゝ (架古陽国阿尾池肖日伏穂保前高天〔七平兼岩横〕榊徹研証米正) —つけても (御相)・
つけて (大)
- ⑦ 3801 ○ ● △×まちし (架古陽御国相阿尾池肖日伏穂保前高〔七平大兼岩横〕榊徹研証米)・待し (正)・まし (天)
↓对照異同ナシ
- ⑦ ⑧ 3802 ○ ● △×まに (架古陽国相阿尾池肖日伏穂保前高天〔七平大兼岩横〕榊徹研証米正) —よに (御)
- ⑧ 3803 ○ ● △×おほつかなさの (架古陽御国相阿尾池肖日伏穂保前高天〔七平大兼岩横〕榊徹研証米正) ↓对照異
同ナシ
- ⑧ 3804 ○ ● △ほとも (架相尾天)・程も (高〔七平大兼岩〕米) —ころも (古陽御国池肖日穂保前〔横〕榊徹研証
正)・比も (阿)・こひも (伏)
- ⑧ ⑨ 3805 ○ ● △×へにけりと (架陽御国相阿尾池肖日伏穂保前高天〔七平大兼岩横〕榊徹研証米正)・へにけり
(古) ↓对照異同ナシ
- ⑨ 3806 ○ ● △×きいえ (架古陽国相尾池肖日伏穂保高天〔七平大兼岩横〕榊研証米正)・聞え (阿前徹) —あるを
(御)
- ⑨ 3807 ○ ● △×たまへり (架相日榊研)・給へり (古陽阿尾池肖伏保前高天〔七平大兼岩横〕徹証米正)・たまえり
(穂) —ナシ (御)・給えたりしも (国)
- ⑨ 3808 ○ △×をりも (架伏穂)・おりも (古陽尾池肖日保前高天〔七平大兼岩横〕榊徹研証米正)・折も (阿) —ナ

シ(御国)・かはかりも(相)

⑨ 3809 ○ ● △×あはれに(架古陽国相尾池肖日伏穂保高〔七平大兼岩横〕榊徹研証米正)・あわれに(天)・哀に

(阿前) — ナシ (御)

⑩ 3810 ○ ● △×あなかに(架古陽御国相阿尾池肖日伏穂保前高天〔七平大兼岩横〕榊徹研証米正) ↓对照異同ナシ

⑩ 3811 ○ ● △×しのひ(架古陽御国相阿尾池肖日伏穂保高天〔七平大兼岩横〕榊研証米正)・忍ひ(前徹) ↓对照異同ナシ

⑩ 3812 ○ ● △×かき(架古陽国相阿尾池肖日伏穂保前高天〔七平大兼岩横〕榊徹研証米正)・かい(御) ↓对照異同ナシ

⑩ 3813 ○ ● △×給つらん(架国相尾池肖日伏高天横榊徹)・給つらむ(七平大兼岩)・給ひつらん(穂)・たまひつらむ(穂)・たまひつらん(御) — 給まつらむ(古)・給へらん(阿前研証米正)・給らん(陽)

〈表1〉

○ ● △× (12) 3777・3787・3795・3797・3798・3799・3801・3803・3805・3810・3811・3812

○ ● △× (3) 3784 国・3785 国・3792 相

○ ● △× (5) 3786 陽・3790 陽・3802 陽・3806 陽・3809 陽

○ ● △× (1) 3813 御〔池肖日伏横榊徹穂〕

○ ● △× (5) 3776 御国・3789 陽国・3791 陽国・3800 陽国・3807 陽相

- △× (1) 3793
- △ (2) ※ 3775・3796
- × (1) 3781
- × (1) 3778 相
- △× (3) 3782 陽・3783 陽・3808 陽
- △ (1) 3788 御
- △ (1) 3804 相
- × (1) 3780
- × (1) 3779 陽
- ◎ (1) 3794

〔表1〕は、異同一覧を先の分類記号別に整理したものである（傍線付記号は、一致伝本を番号の下に示した）。全39文節中、有意の異同は30文節に存する。定家本系統との一致を含まない文節は5、河内本系統との一致を含まない文節は5で、文節単位では本切本文は非定家本・非河内本の要素を等分に有している。一方、別本との不一致は◎を付した1箇所しかないが、別本全体と一致するのは、異同のない12箇所を除けば、○●△(2)・○●×(1)の3例のみであり、別本のみを他系統を含まない一致はない。各別本との不一致という点では、もともと一致率の高い陽明文庫本が6箇所、非定家本・非河内本と近い。

将は、とうの弁のすしつることをおもふに、御心のをに、(おそろしく)、よの中わつらはしくおほえ給て、かん

のきみにもをとつれ(きこえ) 給はて、ひさしうなりにけり。はつしくれ、いつしかとけしきづくに、いかゝおほされけん、かれより、

こからしのふくにつけつゝまちしまにおほつかなきのほともへにけり
ときこへたまへり。をりもあはれに、あなかちにしのひかき給つらん

右は、翻刻本文に句読点を付し、各々の箇所について、非定家本を傍線、非河内本を波線、非陽明文庫本を塗りつぶしで示したものである(独自異文は二重傍線)が、波線部分が1箇所集中(他は分散)していることがわかる。当該箇所を尾州家河内本(以下、「尾州家本」)で示すと、

〈尾州家本〉大將は頭弁のすむしつる事も心のおにゝおそろしくよのなかわつらはしくおほえ給てかんのきみにもをとつれ給はて

となる。省略された「おもふに」の内容を「おそろしく」と具体化して、「心のおに」のわかりにくさを緩和していると理解される。このあとの「かんのきみにもをとつれ給はて」は、河内本と本切・御物本のみが「きこえ」を持たないが、河内本は(本切・別本も)朧月夜からの便りに対しては「いかゝおほされけん」と重く遇している。敬意レベルでは、定家本の「きこえ」―「おほし」に対して、河内本の「ナシ」―「おほされ」は、明らかにバランスを欠いているが、河内本は「大將はくひさしうなりにけり」を源氏の内心に沿って叙述しており、その中に外部との関係性を示す謙讓表現をあえて入れなかったとも解釈され、その閉塞した状況を破るように外部(朧月夜)から舞い込んだ突然の手紙に対しては、朱雀院の尚侍としての公的な立場にふさわしい待遇を与えたものとも理解される。たゞしこゝは、「よの中わつらはしくおほえ給」ふ結果として、手紙を書くのさえ億劫になっている源氏の心情を汲み取るべきで

あり、河内本で省略された「おもふに」も、下の「おほえ給て」とは重畳するものではなく、何とはなく漠然とした
具体的ではあるが、その結果が量り知れない不安を言い当てゝおり、それが「御心のおに（自らの心に巣くう猜疑
心〓疑心暗鬼）」の正体でもあり、世の中全般を煩わしく思うことの直接の原因でもある。河内本の「おそろしく」は、
そのような言い知れない不安を現実的な畏れに限定してしまっており、「心のおに」という含みのある表現を生かしてき
れていないといつてよいが、その拠つて来たところは不明である。本切は、波線部分は採っておらず、「きこえ」も
欠いているという、一見すると折衷的な本文に見えるが、最も河内本的な本文である波線部分を採らない本切は、総
体的に河内本に親近していても河内本系統と認定することを躊躇わせるものである。

本切の独自異文を除き、定家本系統との異同を有する4箇所について見ておくと（以下、「定」〓定家本・「河」〓
河内本、「別」〓別本の各全般を示し、個別の異同は各本の略号を用いる）、3775「大將は」（架河別）―「大將」
（定）・3796「おほされけん」（架河別）―「おほしけん」（定）は、定家本と河内本・別本が対立する。これらは、文
字的〓意味的情報量の多い別本本文を河内本が摂取したと考えてよい例である。3796では、定家本は「おぼす」のみ
で朧月夜への敬意は充分との判断であろうし、河内本・別本では朱雀院の尚侍という公的な立場に対する敬意表現と
して「（れ）」が付加されたものと理解される。こゝは両者の関係は私的な領域にとどまるという定家本の判断が尊
重されるべきであるが、より俯瞰的に見て公的な敬意表現を纏わせることも、否定されるべきではない。

3804「ほとも」（架河相）―「ころも」（定陽御国）は意味上の差異は殆どない。「ころ」よりは「ほど」の方が意味
的な広がりはあるが、こゝは接続する「へにけり」との表現の親和性によって選択されたものと考えた方がわかり易
い。河内本はより常套的な〓わかり易い別本の本文を採用したものであろう。

3796にも河内本に別本（御物本）が同居しており、「きこえ」を持たない本文の存在は保証されるが、情報量の多

い本文を採用する通例からは外れている。御物本では「大将は、とうのへんのすむしつることを、御心のをにわつらはしう、世の中いよ／＼はしたなくおほえたまひて、かんの君にひきしくとつれたまはて」とあり、「わづらはし」いのは自らの心の鬼そのものであることが明瞭に示されており、他のどの伝本とも異質である。

次に、本切の独自異文(3794)を見てみたい。この部分には異同が多く、別本四本はすべて一致した本文を持たない(陽明文庫本・伝為相本は独自異文)。河内本は岩国吉川家本を除き「けしきたつに」で一致するが、定家本系統は「けしきたつに」と「けしきたつ日」に二分される(後者では別本の国冬本が最も書写の古い例となるが、書写の新しい伝本ではよく見られる本文でもある)が、時を指示するという意味では、両者に違いはない。架蔵切「けしきづく」は『源氏物語』全体でも僅少な用例に属し、大島本では「風などはふくもけしきつきつていそあれ」(須磨125162)。「いとおほとかにをんなしきものからけしきつきてそおはするやとて」(野分281169)の2例を数えるにすぎない。⁽¹⁷⁾前者には目立った異同はないが、後者では「けしきそ」(陽麦阿尾)・「氣しきたちてそ」(保)といった異同が確認される。「けしきづく」は「そのような気配、兆しが感じられる」意で、「けしきだつ」は「様子がおもてに出る」、「けしきばむ」(陽)も「それらしい様子が」外に表れる」ところから、「心中の思いが表情や仕草などに顕れる」ことに用いられるが、原義的には際立った違いは見いだせない。「けしきつくる」(相)は「強いて(わざと)そのような様子をする」といった意に用いられるので、「はつしぐれ」にはそぐわない表現といえる(こゝで文が終止するのは不自然であり、誤写の可能性が高い。本切とは1文字の違いしかなく、元は同文であった可能性も考慮される)。

「はつしぐれ」はまだ顕現しないものであり、その予兆として「こがらし」が機能するとすれば、「須磨」に吹く「風」のように嵐の予兆を胎んだ抑制的な表現として「けしきづく」とあった方が効果的であるかも知れない(「こがらし」は、現実の初時雨の前触れであるだけでなく、ふたりに向けて吹く冷たく「わづらはし」い「世の中」の風を

象徴するという意味においても)。本箇所では定家本・河内本が一致し、別本の一部はそれらを指示しつゝも、四本それれが別々の本文を有しており、本切も独自異文となっている。

本切の本文は、先の集中的な波線部を除いて河内本に一致するものであるが、その異同が河内本とのみ一致する箇所は一つもなく、すべての異同に別本系統の一部がともなっている（こうした点からも、河内本が多様な伝本の複合体であることが理解される）。各別本との不一致数を文節数のみで比較すると、陽明文庫本（6）・御物本（16）・国冬本（11）・伝為相本（11）となり、本切の本文は陽明文庫本に近いといえる。行文的にも陽明文庫本と本切には文脈を異にするほどの大きな差異はない（河内本不一致箇所「ことをおもふに御心のをに」では、定家本と陽明文庫本のみが本切と一致する）。

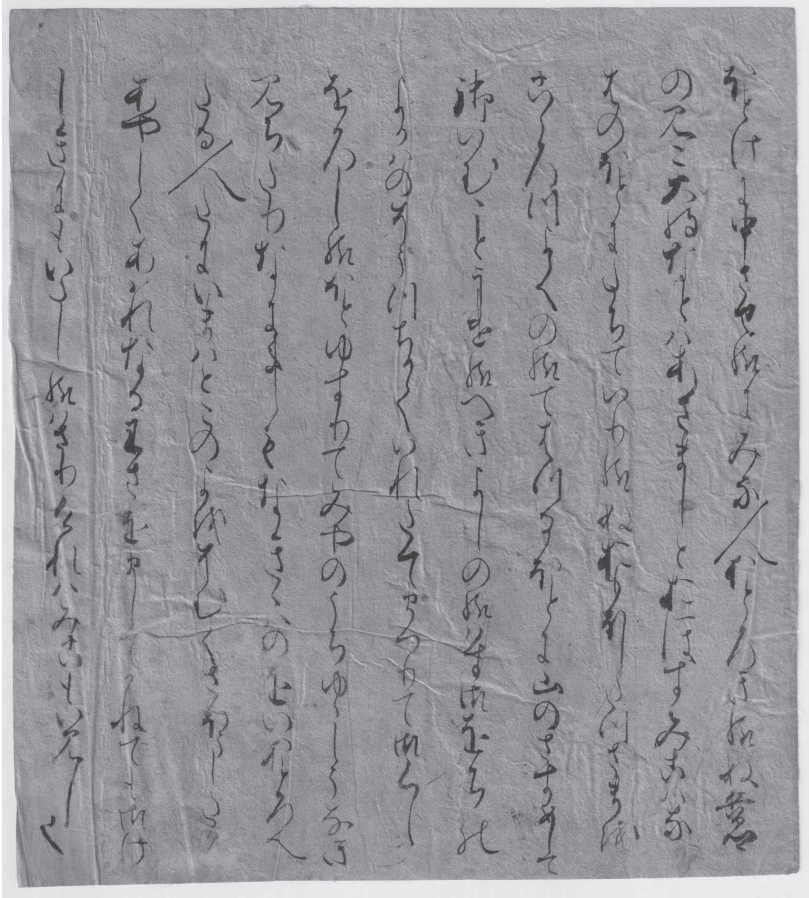
以上の検討からは、本切は別本系統の一伝本の断簡と見た方がわかり易く、河内本との混交伝本の可能性も視野に入れておくべきであろうが、河内本の成立に影響を与えた古本系別本を祖本に持つ一伝本の断簡として見れば、近接した本文を持つ陽明文庫本よりもその影響は強いともいえる。わずか一葉の断簡からわかることは僅少であり、まさに管見の誹りを免れないので、さらにツレの出現を俟ちたい。

2、伝二条為明筆六半切〔源氏物語・賢木〕（二）

図版②は未装の断簡で、極札（薄葉格紙、一五・四×二・七cm）には、

二條家爲明卿爲藤卿男正二位權中納言三任
貞治三年十月二十七日薨七十〔清原（朱印）〕

とある。この「清原」印については、該当する人物を比定できず、安政四1857年の清原某による極めとしか特定でき



図版② 伝二条為明筆六半切〔源氏物語・賢木〕(二)

ない。同じ「清原」印極札を付した一連の古筆切群は、旧水野家所蔵の古筆帖三冊から剥ぎ取られたものであることが知られるが、水野家についても特定できていない。本紙裏中央上右に「○為明公」^{「永家」□}、左下隅に「二十一」と墨書。本紙の料紙は楮打紙、一五・四×一四・〇cmで、一面十一行書。元は六半形の冊子本と推定される。これもツレは確認できず、為明の真筆とは別筆であるが、書写年代は鎌倉末期頃と推定される。

本紙を翻刻しておく（□は破損部分）。8行目末尾は他箇所の「へ（β）」と比較して別字と判断し、「え（衣）」と判読、

ほとけに申させ給にみな人おとろき給ぬ兵部卿

のみこ大将などはあさましとおほすみこはな□

はのほとにたちていり給ぬおもほしたつさまを

こゝろつよくの給てはつるほとに山のさすめして

御いむことうけ給へきよしの給はす御をちの

よかはのそうつちかくいれたてまつりて御くし

をろし給ほとゆすりてみやのうちゆゝしうなき

みちたりなに事もなきゝはのをいおとろえ

たる人たにいまはとこのよをそむくさほうしたる□

あやしくあはれなるわさをましてかねても御け

しきにもいたし給はさりければみこもいみしく

となる。これも、書写内容は『源氏物語』「賢木」(大成三六五11～三六六3/別本集成104036～4038)で、桐壺院の一周忌に法華八講を主催した藤壺が、その最終日の結願として出家を遂げるといふ場面にあたる。

(一)と同様に、架蔵切を底本として異同一覧を掲げる(●は僅少異文、▲は僅少異文に河内本が同居するものを示す)。

① 4036 ○● △×ほとけに (架陽榊米)・仏に (古御国相阿尾池肖日伏穂保前高天〔七平大兼岩横〕徹研証正) ↓対照異同ナシ

① 4037 ○△×申させ (架古陽国尾池肖日伏穂保前高天〔七平大兼岩横〕榊徹研証米正) — 申 (御相阿)

① 4038 ○● △×給に (架古陽国相阿尾池肖伏穂保前高天〔七平大兼岩横〕榊徹研証米正)・たまふに (御日) ↓対照異同ナシ

① 4039 ○● △×みな (架古陽御国相阿尾池肖日伏穂保前高天〔七平大兼岩〕榊徹研証米正)・ナシ^{ナミナ} (横) ↓横「みな人々おとろき給ぬ」補入) ↓対照異同ナシ

① 4040 ●● △人 (架国相天大) — 人々 (古陽御阿尾池肖日伏穂保前高〔七平兼岩〕米)・人々 (榊徹研証正)・ナシ^{ナシ} (横)

① 4041 ○● △×おとろき (架古陽御国相阿尾池肖日穂保前高天〔七平大兼岩〕榊徹研証米正)・をとろき (伏)・ナシ^{ナシ} (横) ↓対照異同ナシ (別本集成)は「おとろきぬ (相穂)」として4041の異同とするが、4042の異同として処理した)

① 4042 ○● △×給ぬ (架古陽国阿尾池伏保前高天〔七平大兼岩〕榊徹研証)・給ひぬ (肖)・たまひぬ (御日米正)・

ナシ十給ぬ (横) —ぬ (相穂)

①② 4043 ◎兵部卿のみこ (架) —兵部卿宮 (古国阿尾池日伏穂保高天〔七平大兼岩横〕 榊徹研証正) ・兵部卿の宮 (前) ・兵部卿宮 (肖) ・兵部卿の宮 (米) ・ひやうふ経の宮 (陽) ・ひやうふきやうの宮 (御) ・中にも兵部卿のみこ (相)

② 4044 △大将などは (架尾高天〔七平大兼岩〕 米) —大将など (陽) ・大将の御心ち (相) ・大将の御心うこきて (国徽) ・大将の御心もうこきて (古阿池肖日伏穂保前〔横〕 榊研正) ・大将の御心も十うこきて 証) ・大将の御心の中うこきて (御)

② 4045 ○△×あさましと (架古陽御阿尾池肖日伏穂保高天〔七平大兼岩横〕 榊徹研証米正) ・浅ましと (前) —そらにて (相) ・あさましく (国)

② 4046 ○●△×おほす (架古陽御阿尾池肖日伏穂保前高天〔七平大兼岩横〕 榊徹研証米正) —ナシ (相) ・おもほす (阿)

② 4047 ○●△×みこは (架古陽国相池日伏穂保前天〔七平大兼岩横〕 榊徹研証米正) ・御こは (御尾兼) ・御子は (阿) ・みこは兵部卿 (肖高) ↓对照異同ナシ

②③ 4048 ※○●△×なかはの (架) ・なかはの (古御国相阿尾池日伏穂保高天〔七平大兼岩横〕 榊徹研米) ・中は (陽肖前証正) ↓〔对照異同ナシ〕

③ 4049 ○●△×ほとに (架古陽御国相尾池肖日伏穂高天〔七平大兼岩横〕 榊徹研証正) ・程に (阿保前米) ↓对照異同ナシ

③ 4050 ○●△×たちて (架古陽御国阿尾池肖日伏穂保高天〔七平大兼岩横〕 榊徹研証米正) ・立て (前) —たち

(相)

③ 4051 ○ ● △×いり (架古陽国相阿尾池日伏穂前高天〔七平大兼岩〕榊研証米正)・入(御肖保徹)・ナシ^ナ (横↓「いり給ぬ」補入) ↓対照異同ナシ

③ 4052 ○ ● △×給ぬ (架古陽御国阿尾池肖穂保前高天〔七平大兼岩〕榊徹研証)・たまひぬ(相日伏米正)・ナシ^ナ (横) ↓対照異同ナシ

③ 4053 ▲ ● △ナシ (架御国相尾高天〔七平大兼岩〕米)―心つよう(古阿肖日保前〔横〕榊徹研証正)・こゝろつよう(池伏穂)・心つよく(陽)

③ 4054 ×おもほしたつ (架阿)―おほしたつ(古陽国相尾池肖日伏穂保前高天〔七平大兼岩横〕榊徹研証米正)・おほしめたつ(御)

③ ④ 4055 ▲ ● △さまをいゝろつよく(架)・さまを心つよく(国相尾高天〔七平大兼岩〕)―さま(古)・さまを(陽阿池肖日伏穂保前横榊徹研証)・さま心つよく(米)・さま心つよう(御)

④ 4056 ○ ● △×の給て (架古国相阿尾肖伏保前高天〔七平大兼岩〕榊証)・の給ひて(徹)・のたまひて(陽日穂研正)・のたまひ(池)・のたまひて(横)―のたまひ(御)・よくし給て(米)

④ 4057 ○ ● △×はつる (架古陽御国相阿尾池肖日伏穂保前高天〔七平大兼岩横〕榊徹研証正)―出る(米)

④ 4058 ○ ● △×ほとに (架古陽国阿尾池日伏穂前天〔七平大兼岩横〕榊徹研証)・程に(御肖保高証米)―ほと(相)

④ 4059 ○ △×山のみさす (架陽御阿尾伏穂高天榊米)・山の座主(古肖保前〔七平大兼岩横〕徹研証正)・やまのみさす(日)―この座主(相)・このさす(国)・やまのみさすを(池)

- ④ 4060 ○ ● △×めして (架古陽御相阿尾池肖日伏穂保前高天〔七平大兼岩横〕 榊徹研証米正) —ナシ (国)
- ⑤ 4061 ▲ ● △御いむ (架国相尾高天〔七平大兼岩〕米) —いむ (古陽御阿池肖日伏保〔横〕 榊徹研証正) ・いむ^成
(前)・いん (穂)
- ⑤ 4062 ○ ● △×こと (架陽国相尾日伏穂保前高天)・事 (古阿池肖〔七平大兼岩横〕 榊徹研証米正) —御事 (御)
- ⑤ 4063 ○ ● △×うけ (架古陽御国相阿尾池肖日伏穂保前高天〔七平大兼岩横〕 榊徹研証米正) ↓対照異同ナシ
- ⑤ 4064 ○ ● △×給へき (明陽国阿尾池肖伏穂保前高天徹証)・給ふへき (正)・たまふへき (古御日〔七平大兼岩横〕 榊研) —給 (相)・たまはるへき (米)
- ⑤ 4065 ○ ● △×よし (架古陽御国相阿尾池肖日伏穂保前高天〔七平大兼岩横〕 榊徹研証米正) ↓対照異同ナシ
- ⑤ 4066 ○ ● △×の給はず (架古国阿尾肖伏前高天〔七平大兼岩横〕 榊)・のたまはず (陽相池日穂保徹研証米正) —のたまふ (御)
- ⑤ 4067 ○ ● △×御をちの (架古陽御国阿尾池肖日伏穂保高天〔七平大兼岩横〕 研証米正)・御おちの (前榊徹) —御おち (相)
- ⑥ 4068 ○ ● △×よかはのそうつ (架陽御国尾日穂天榊研)・よ川のそうつ (前高米)・よかわのそうつ (古〔七平大兼岩〕〔横〕)・よかはの僧都 (相池肖伏証正)・よ川の僧都 (徹) —みかはの僧都 (保)・よ川そうつ (阿)
- ⑥ 4069 ○ ● △×ちかく (架国相阿)・ちかう (古陽御尾池肖日伏穂保前高天〔七平大兼岩横〕 榊徹研証米正) ↓対照異同ナシ
- ⑥ 4070 ○ ● ●いれ (架御相) —まいり (古陽阿尾池肖日伏穂保前高天〔七平大兼岩横〕 榊徹研証米正)・めしいれ

(国)

⑥ 4071 ●○ たてまつりて (架御国相) — 給て (古陽阿尾肖伏穂保前高天〔七平大兼岩横〕 榊徹研証米正) ・たま
むつ (池日)

⑦ 4072 ○● △×御くし (架古陽御国相阿尾池肖日伏穂保前高天〔七平大兼岩横〕 榊徹研証米正) ↓对照異同ナシ

⑧ 4073 ○● △×をろし (架相日伏穂) ・おろし (陽御阿尾肖保前高天〔七平大兼岩横〕 榊徹研証米正) ・をろし^{△&シ}

(池) ・^{十おろし七米} (古) — おろさせ (国)

⑨ 4074 ○● △×給 (架古陽御国相阿尾肖伏保前高天〔七平大兼岩横〕 榊徹研証正) ・給ふ (米) ・たまふ (日穂) ・

^{△&給}給 (池) ↓对照異同ナシ

⑩ 4075 ▲● △ほとゆすりて (架国相尾米) ・程ゆすりて (高天〔七平大兼〕) — 程に (古〔横〕証) ・ほとに (阿池
肖日伏穂保前榊徹研) ・ほとに^{△ほと} (正) ・ほと (陽御国) ・ほとにゆすりて (岩) ↓〔別本集成〕は「ほと
(国)」とし、4078「ゆすりて宮のうち」とするが、4075「ほとゆすりて (国)」として処理し、以下も
それに準じる)

⑪ 4076 ○● △×みやの (架池) ・宮の (古陽御国相阿尾肖日伏穂保前高天〔七平大兼岩横〕 榊徹研証米正) ↓对照
異同ナシ (国)

⑫ 4077 ○● △×うち (架古陽御国相阿尾肖日伏保前高天〔七平大兼岩横〕 榊徹研証米正) ・中 (池穂) ↓对照異同
ナシ

⑬ 4078 ▲● △ナシ (架国相尾高天〔七平大兼岩〕米) — ゆすりて (古御阿池肖日伏穂保前〔横〕 榊徹研証正) ・ゆ
すりみちて (陽)

⑦ 4079 ○△×ゆゝしう (架古阿尾池肖日伏穂保前高〔平兼岩横〕 榊徹研証米正)・ゆゝしく(陽天七大)―ナシ
(御国相)

⑦⑧ 4080 △なきみちたりなに事もなきゝはの(架尾)・なきみちたりなに事もなききはの(七平大兼岩)米)・
なきみちたりなにこともなきゝはの(高)・なきみちたりなにこともなききはの(天)―なきみちたり
(陽)・なきみちたりなにとなき(古阿池肖日伏穂保前〔横〕 榊徹研証)・なきみちたり何となき(正)・
なきみちたりなにとなきゝはの(御)・なきみちたりなにとんなき人の(国)・なきあひたりなにとまな
う(相)

⑧ 4081 ○●△×をい(架陽御相日伏)・おい(古阿尾池肖保高天〔七平大兼岩横〕 榊研証正)・おひ(国)・をひ
(穂)・老(前徹米) ↓対照異同ナシ

⑧⑨ 4082 ○●△×おとろえたる(架陽御国阿日)・おとろへたる(古尾肖伏保前高天〔七平大兼岩横〕 榊徹研証
米正)・をとろへたる(相池穂) ↓対照異同ナシ

⑨ 4083 ○●△×人たに(架古陽御国相阿尾池肖日伏穂保前高天〔七平大兼岩横〕 榊徹研証米正) ↓対照異同ナシ

⑨ 4084 ○●△×いまはと(架古陽御国相尾池肖日伏穂保高天〔七平大兼岩横〕 榊研証米正)・今はと(阿徹)・今い^は
と(前) ↓対照異同ナシ

⑨ 4085 ▲●△このよを(架国相尾天)・この世を(御〔七平大岩〕)・此世を(米)―よを(古陽池肖日伏保前高
〔横〕 榊研証)・世を(阿穂徹正)・このこのよを(兼)

⑨ 4086 ○●△×そむく(架古陽御相阿尾池肖日伏穂保前高天〔七平大兼岩横〕 榊徹研証米正)―そむくは(国)

⑨ 4087 ※△さほうしたる□(架)・さほうしたるは(尾高天〔七平大兼岩〕 米)―さほうはしりたるは(相)・程は

(古肖穂〔横〕)・ほとは(御阿池日伏保前榊徹証正)・ほ△は(陽)・ナシ(国)

⑩ 4088 ○●△×あやしく(架国)・あやしう(古陽御阿尾池肖日伏穂保前高天〔七平大兼岩横〕榊徹証米正)――ナシ(相)

⑩ 4089 ○●△×あはれなる(架古陽御国相尾池肖日伏穂保高〔七平大兼岩横〕榊徹証米正)・あわれなる(天)・哀なる(前)――あはれに(阿)↓〔別本集成〕は「あはれなるを(相)」とし、4089の異同とするが、4090のみの異同とした

⑩ 4090 ○△×わさを(架古陽阿尾池肖日伏保前高天〔七平大兼岩横〕榊徹証米正)・程を(御)・さを(穂)――を(相)・わさなり(国)

⑩ 4091 ○●△×まして(架古陽御国相尾池肖日伏穂保前高天〔七平大兼岩横〕榊徹証米正)・まいて(阿)↓対照異同ナシ

⑩ 4092 ●●かねても(架国相)――かねての(古阿池肖日伏穂保前〔横〕榊徹証正)・かねて(陽御尾天〔七平大兼岩〕米)・ナシ(高)

⑩～⑪ 4093 ○△×御けしきにも(架古陽阿尾池保天〔七平大兼岩横〕榊米)・御気しきにも(肖日前高研正)・御気色にも(伏穂徹証)・御けしきにも(御)――御けしきに(相)・御気色に(国)

⑪ 4094 ○●△×いたし(架古陽御国相阿尾池肖日伏穂保前高天〔七平大兼岩横〕榊徹証米正)↓対照異同ナシ

⑪ 4095 ●●給はさりければ(架国)・たまはさりければ(御)――給はさりつる(古陽阿尾肖伏穂保前高天〔七平大兼横〕徹証正)・たまはさりつる(池日研米)・給はさりつる(榊)・給はさりつれば(相)・給はぬ(岩)

- ⑩ 4096 ● ○ ナシ (架御国相) — 事なれは (古陽阿尾肖伏穂前高天 [七平大兼岩横] 徹研証米正) ・ ことなれは (池日保) ・ 事なれ△ (榊)
- ⑪ 4097 ○ ● △× みこも (架古陽国相尾池日保天 [七平大兼岩横] 榊徹研証米正) ・ 御こも (御穂) ・ 御子も (阿) ・ 身にも (伏) ・ 齋こも (前) ・ 兵部御 (みこも) (肖) ・ 兵部 (みこも) (高) ↓ 対照異同ナシ
- ⑫ 4098 ○ ● △× いみしく (架国) ・ いみしう (古陽御相阿尾池肖日伏穂保前高天 [七平大兼岩横] 榊徹研証米正) ↓ 対照異同ナシ

〈表2〉

- ● △× (27) 4036 ・ 4038 ・ 4039 ・ 4041 ・ 4047 ・ ※4048 ・ 4049 ・ 4051 ・ 4052 ・ 4057 ・ 4063 ・ 4065 ・ 4068 ・ 4069 ・ 4072 ・ 4074 ・ 4076 ・ 4077 ・ 4081 ・ 4082 ・ 4083 ・ 4084 ・ 4089 ・ 4091 ・ 4094 ・ 4097 ・ 4098
- ● △× (3) 4056 陽 ・ 4062 陽 ・ 4066 陽
- ● △× (10) 4042 国 ・ 4046 国 ・ 4050 国 ・ 4058 国 ・ 4060 相 ・ 4064 国 ・ 4067 国 ・ 4073 相 ・ 4086 相 ・ 4088 国
- △× (4) 4045 ・ 4059 ・ 4090 ・ 4093
- △× (2) 4037 陽 ・ 4079 陽
- ● △ (2) 4053 御 ・ 4085 御
- △ (4) 4055 ・ 4061 ・ 4075 ・ 7078
- △ (1) 4040 天大
- ● (2) 4071 御 ・ 4096 御

○ (2) 4070 御相・4095 御国

● (1) 4092

△ (3) 4044・4080・※4087

× (1) 4054 匣

◎ (1) 4043

〔表2〕は、異同一覧に付した分類記号別に整理した(●▲は分類記号とは別なので含めない)ものであり、全63文節中、有意の異同を有するのは36文節となる。表中、定家本との一致を含まない箇所は16(阿里莫本と一致するのみ)の×を加えれば17)文節に及ぶ。河内本との不一致箇所は7(天理河内本・大島河内本のみ一致する●△を含めれば8)文節となる。河内本不一致箇所は、定家本一致箇所を原則として含まない(×の1例のみ)。別本系統との不一致箇所は4文節であるが、別本四本は同一系統とは見做せない¹⁾ので、この数値は参考値ではない。(表2)からは、本切の本文が非定家本・非河内本系統、すなわち別本系統であることが見て取れるが、各別本との異同数(括弧内は独自異文数)は、陽明文庫本16(3)・御物本15(6)・国冬本14(8)・伝為相本19(13)となっており、各別本の不一致数は定家本と同等かそれよりも多く、本切の本文はこれらの別本各本よりは河内本に近いことになる(河内本はこれらの別本を取捨したもので、当然の結果といえる)。

次に、本切と少数の共通本文を有する僅少異文(●)を中心に考察するが、僅少異文とした5例は、(一)4040、(二)4070・4071、(三)4092・4095・4096のe箇所に分けて見るべき異同と考えるので、順を追って見ていきたい。

(一)は、「みな人」(架国相天大)―「みな人」(定阿陽御)で、架蔵切は国冬本・伝為相本のほか、河内本に属する天理河内本・大島河内本とのみ一致する。意味的には「みな」がその場の人々をすでに指し示しているので、機能

的には差異のない異同である。

(二)では、「ちかく(めし) いたたてまつりて」(架御相〔国〕) — 「ちかうまいり給て」(定河陽) の対立する本文を持つが、これは動作主体の差異による違いである。諸本が「近くにやってきなさつて」と高僧である横川の僧都の行動に対する敬意表現をとるのに対して、僅少異文は、藤壺が僧都を御簾内に「入れ申し上げて」と、自身の主体的判断にともなう行為において母方の伯父に対する藤壺の敬意(謙讓)を表したものになっている。それにともなつて、このあとの「御くしをろし給」も、諸本では僧都が「髪をおろしなさる」となるが、僅少異文では藤壺が「落飾なさる」と読むことができ、常に主体的に描かれることになる。藤壺が御簾内にいることは、兄の兵部卿が出家の真意を確かめるために「たちていり給ぬ」とあることで明らかであるが、この落飾も藤壺の御座所である御簾内での出来事であり、藤壺が僧都を招き入れ落飾する主体として描かれることに違和感はない(この場の主役は藤壺である)。

このあとには▲を付した箇所が続き、「ほとゆすりてみやのうち」(架国相河) — 「ほとに(ほと) 宮のうちゆすりて」(定御〔陽〕) と本文が対立するが、こゝでも本切は国冬本・伝為相本と一致する。「ゆすりて」の主体は、定家本ではその場にいた人々が「声を震わせて」といった意味にしかとれない(この点では河内本も藤壺を一貫した動作主体としては描かない)が、本切や国冬本・伝為相本の本文では藤壺自身の落飾後の短くなった髪を確かめる動作のようにも感じられ、「宮のうち」以下(4079～4080)は、その仕草を受けての人々の哀しみと捉えることもできようか。たゞし直前まで一致をみていた国冬本・伝為相本は、これらの箇所では本切とは一致せず、本切は河内本本文とのみ完全な一致を見せる。架蔵切は4085「このよを」(架御国相尾) — 「よを」(定陽)、4087「さほうしたる□」(架河) — 「ほとは」(定御〔陽〕)「相」さほうしりたるは」・国ナシ」といった箇所でも河内本と一致しており(伝為相本とは近似する)、これらの一致を重く見れば、本切は河内本の影響下にある本文を持つものと判断されようが、本切の相

本が河内本に影響を与えた可能性も考慮されなければならない（少し離れるが、404「大将などは」も本切が河内本とのみ一致する例である）。

(三)では、「かねても（御「かねて」）御けしきにも（国相「に」）いたし給はさりつれば（相「ければ」）」（架御国相）―「かねての（陽河「かねて」）御けしきにも給はせりつる事なれば」（定河陽）が対立し、架蔵切は御物本・国冬本・伝為相本と小異を有しながらも、定家本・河内本とは一致せず、別本系統の本文を持つものと判断される。

(一)(三)を勘案すれば、(二)で検討した河内本との関係は、寧ろ本切祖本→河内本という影響関係を想定させるものであり、他の別本に比較してもその影響の度合いが大きいことが示唆される。僅少異文を参照すれば、本切の本文は国冬本・伝為相本に近く、独自異文である4043「兵部卿のみこ」を共有（相「中にも兵部卿のみこ」）する点からは、伝為相本との距離がより近く思われるが、伝為相本には多量の独自異文が認められるなど、直系的な書承関係は想定できない。寧ろ本切の祖本は、河内本の編集に用いられた個別的な別本のうちの一本と見ておく方がわかり易い。

この伝為明筆「賢木」本文は、大島本などの見せる物語世界とは少しく風景を異にしており、河内本との親和性は高いものゝ、河内本が採用しなかった本文（とその描く世界）をも保存しているものと思われる。本切の祖本として古本系統本を想定することは、それほど無理のない結論のように思われるが、一葉の古筆切で見渡せる世界はあまりにも狭く、さらなるツレの出現に期待したい。

〔注〕

- (1) 伊井春樹・高田信敬編『古筆切提要——複製手鑑索引——』(淡交社、昭和五十九 1984 年一月) 所収の影印に依る。
- (2) 小林強「源氏物語関係古筆切資料集成稿」(伊井春樹編『本文研究 考証・情報・資料』第6集(和泉書院、平成十六 2004 年五月) 所収) の「為明」項には十五種二十三葉(別に、梗概本一種十葉)が掲出されるが、他の古筆切関係の集成書も含めて、「賢木」を写真内容とする切は確認していない。古筆切に限らず、天理図書館蔵池田本『源氏物語』、陽明文庫蔵『源氏物語』(「玉かつら」[まき柱])、前田育徳会尊経閣文庫蔵『源氏拔書』などの伝称筆者としても二条為明の名が登場するが、古筆切の元となった写本そのものに為明の名が冠されていたことが、古筆切の側に投影されたものと考えらるべきであろう。
- (3) 為明の事跡については、安田徳子「二条為明の生涯」(『岐阜聖徳学園大学国語国文学』19号、平成十二 2000 年三月) 参照。
- (4) 池田龜鑑編著『源氏物語大成』第二冊「校異篇」(中央公論社、昭和五十九 1984 年十一月普及版初版) に依る(以下、「大成」と略記。頁・行は省略し、漢数字は頁数、算用数字は行数を示す)。
- (5) 源氏物語別本集成刊行会編『源氏物語別本集成』第三卷「葵々須磨」(桜楓社、平成二 1990 年十月) に依る(以下、「別本集成」と略記し、巻別番号は省略)。なお、所収される各伝本(大島本・尾州家河内本・陽明文庫本・御物本等) の引用本文は、同書の翻刻本文に依る。
- (6) 源氏物語別本集成刊行会編『源氏物語別本集成続』第三卷「葵々須磨」(おうふう、平成十八 2006 年九月)。
- (7) 加藤洋介編『河内本源氏物語校異集成』(風間書房、平成十三 2001 年二月)。
- (8) 本文引用の際の諸本の略号は、私に付したものを除き、概ね「別本集成」「別本集成続」「河内本集成」「大成」に倣うが、「大成」「河内本集成」が中京大学図書館蔵大島本に「大」を充てるため、古代学協会蔵大島本は「古」とし、日本大学蔵三条西家本(大成「三」・別本集成続「日」)は「日」、国立歴史民俗博物館蔵高松宮本(大成・河内本集成「宮」、別本集成続「高」)は「高」とした。「榊・徹・研」は国文学研究資料館「国書データベース」、「証」は宮内庁書陵部ホームページ「書陵部所蔵資料目録・画像公開システム」、「正」は大正大学附属図書館「OHDAI デジタルアーカイブス」(上野英子「大正大学蔵『源氏物

語』について」『源氏物語研究』第7号（翰林書房、平成十四年四月）参照。「榊（賢木）」については伝称筆者「飯尾常房三善氏息女」、本文は「肖・三」に近いが独自異文も目立つ」とある）に公開される画像に依り、「米」は国立国語研究所ウェブサイトに公開される「米国議会図書館蔵『源氏物語』翻字本文」（「賢木」翻字担当、杉本裕子・菅原郁子・浅川槇子、平成二十三年三月二十四日公開、平成二十五年十一月十二日更新）に依る。

（諸本略号）

架 伝二条為明筆六半切（架蔵）

榊 榊原本（国文学研究資料館蔵）

徹 書陵部正徹本（宮内庁書陵部蔵）〔554・14〕

研 国文研正徹本（国文学研究資料館蔵）〔サ4・75・10〕

証 書陵部三条西家証本（宮内庁書陵部蔵）〔553・10〕

米 米国議会本（米国議会図書館蔵）

正 大正大学本（大正大学図書館蔵）

〔以下、別本集成〕

古 大島本（古代学協会蔵）

陽 陽明文庫本（陽明文庫蔵）

御 御物本（東山御文庫蔵、各筆源氏）

国 国冬本（天理図書館蔵）

阿 阿里莫本（天理図書館蔵）

相 伝冷泉為相筆本（静嘉堂文庫蔵）↓伝為相本

尾 尾州家河内本（名古屋市蓬左文庫蔵）

伝二条為明筆源氏物語切「賢木」の性格

〔以下、別本集成続〕

池 池田本（天理図書館蔵）

肖 肖柏本（天理図書館蔵）

日 日大三条西家本（日本大学蔵）

伏 伏見天皇本（古典文庫）

穂 穂久邇文庫本（穂久邇文庫蔵）

保 保坂本（東京国立博物館蔵）

前 前田本（尊経閣文庫蔵）

高 高松宮本（国立歴史民俗博物館蔵）

天 天理河内本（天理図書館蔵）

〔以下、河内本集成〕

七 七毫源氏（東山御文庫蔵）

平 平瀬本（文化庁蔵）

大 大島河内本（中京大学図書館蔵）

兼 一条兼良奥書本（天理図書館・書陵部蔵）

岩 岩国吉川家本（吉川史料館蔵）

〔以下、大成〕

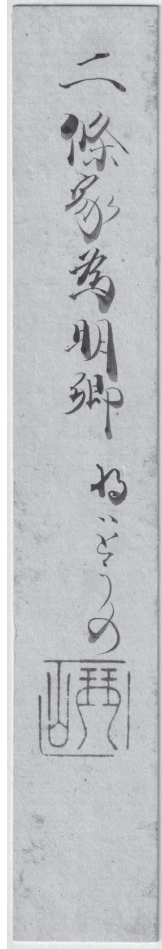
横 横山本（所在不明）

（9）使用する校異符号は以下の通り（合点〔 〕については「||」を付さない。

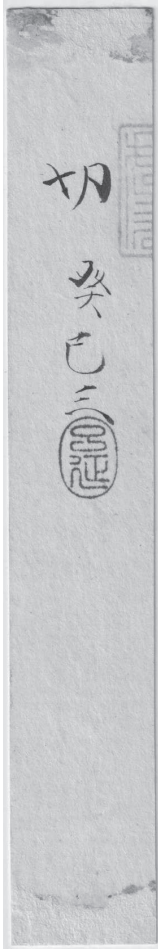
||（傍書）＋（補入・記号あり）±（補入・記号なし）\$（ミセケチ）&（なぞり）△（不明）┌（改行）

- (10) 3813 に関しては、「へ(下)」「つ(川)」の誤記＝誤読にその生因が求められ、類別の参考にならないと考えて除外した。
- (11) 源氏の返歌には「ころの」(諸本異同ナシ)とあり、元々の本文は「ころも」とあったことがわかる。
- (12) 池田龜鑑編著『源氏物語大成』第七冊「索引篇」(中央公論社、昭和六十一年四月普及版初版)に依る。

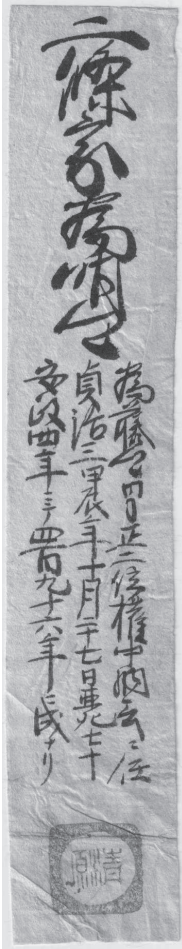
図版① 極札(表)



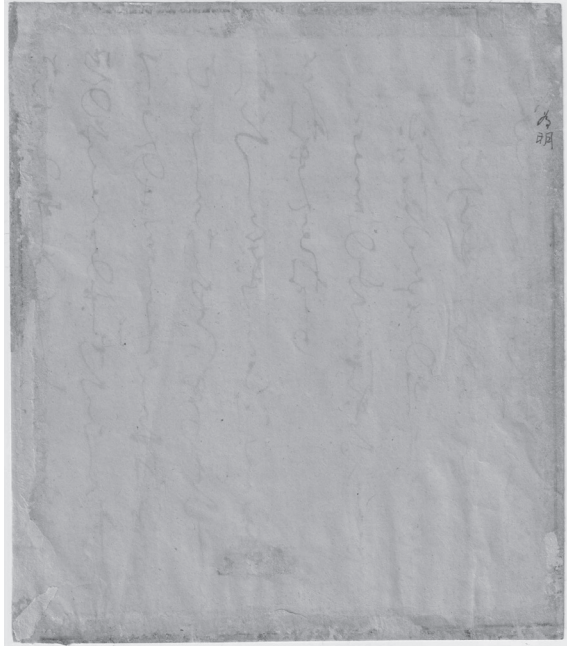
図版① 極札(裏)



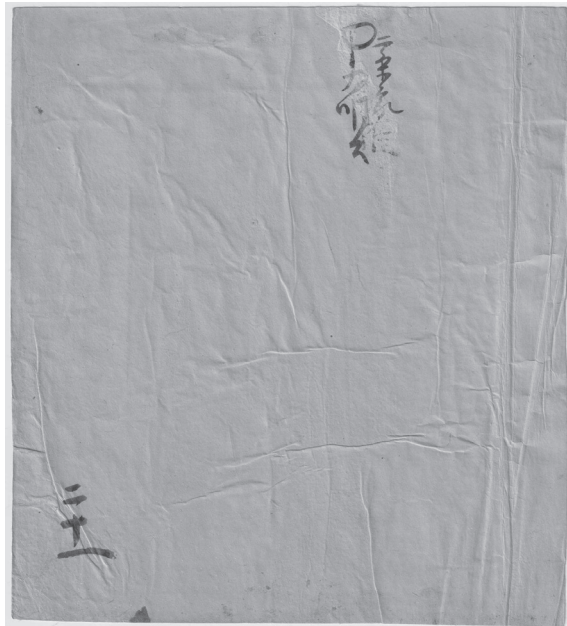
図版② 極札



伝「二条為明筆源氏物語切「賢木」の性格



図版①
裏面



図版②
裏面